謡曲詞章の研究

――世阿弥の修羅能について――

田辺啓三

一

現行修羅能十六番のうち、その大半をしめる十二番が世阿弥作と認められている。他の四番も「生田敦盛」のみが禅鳳作で、「俊成忠度」「通盛」「巴」の三番は、世阿弥作と疑われたり、何等か世阿弥の手が加わっていると推測されるのである。能楽のあらゆる分野に亘って不世出の才能を示している世阿弥は、能作の分野でも、現行曲の半数近い作品を残しているが、修羅能をはっきりと確立した功績も極めて大きいものといわなければならない。花伝書第二物学条々のなかで、「修羅、これ又一体なり、よくすれども、面白き所まれなり、さのみにはすまじきなり。」といって、修羅が亡父観阿弥の教えであることを明かにし、戦場裡の争斗という血腥い内容を、いかに幽玄美を理想とする能にふさわしいものに変えていったかというところに、世阿弥が修羅能を確立した根拠が存在する。これらの研究については、金井清光氏や戸井田道三氏の秀れた発表、高木市之助氏、鈴木暢光氏らの御研究がある。私はこれら先賢の御意見を参考にして、世阿弥の謡曲作製の特徴を、その詞章の面から検討してみたい。なお詞章の研究では、野上豊一郎氏、佐成謙太郎氏、峯岸義秋氏の御研究に負う所が多い。

二

世阿弥作十二番の修羅能のうち、「敦盛」「実盛」「忠度」「清経」「頼政」「八島」の六番は「申楽談儀」によって世阿弥作と確信できるが、他の六番「箙」「兼平」「経政」「田村」「知章」「朝長」は、第二資料ともいうべき、「能本作者註文」「二百十番謡目録」などによって世阿弥作と認められている。従って、小論では前者の六番について、その詞章、特に引用詩歌について調べてみたいと思う。修羅能の典拠は平家物語・源平盛衰記などの軍記物語であって、その詞章も典拠となる原典の記事や章句がよく使われているのは勿論であるが、ここでは、修羅と対称をなす幽玄的なものとして、和歌に重点をおいた次第である。

六番の修羅能の構成は次のようである。

「敦盛」シテ　前　草刈男　後　平敦盛　面敦盛又は十六、今

若　ワキ　蓮生法師　出典　平家物語巻九「敦盛最後の事」
源平盛衰記巻三十八「平家公達最後並頸共掛一谷事」「熊谷送敦盛頸並返状事」
「実盛」シテ　前　老翁　後　斉藤実盛　面朝倉尉又は三光尉
ワキ　他阿弥上人
出典　平家物語巻七「実盛最後の事」
「忠度」シテ　前　老樵夫　後　平忠度　面中将　ワキ　俊成御内の僧
出典　平家物語巻七「忠度都落の事」巻九「忠度最後の事」源平盛衰記巻三十二「落行人々歌、附、忠度自淀帰謁俊成事」巻三十七「忠度通盛等最後事」
「清経」シテ　平清経の霊面中将ツレ　清経の妻
ワキ　淡津三郎
出典　平家物語巻八「太宰府落」
源平盛衰記巻三十三「清経入水の事」
「頼政」シテ　前　老翁　後　源頼政　面　頼政　ワキ　旅僧
出典　平家物語巻四「橋合戦の事」「宮の御最後の事」
「八島」シテ　前　漁翁　後　源義経　面　平太　ワキ　旅僧
出典　平家物語巻十一「大阪越の事、嗣信最後の事、弓流しの事」

シテが前と後で変るのは、いわゆる複式能で、前シテが主人公の霊として仮りに現われてきたもので、能の代表的な構成である。従って「清経」は例外的なもので、他に「経正」「俊成忠度」「生田敦盛」がこれに属する。シテの面では、壮年をしめす平太、青年の中将、少年の敦盛と分れるが、敦盛は例外もあるが特殊面として、頼政と同じように一定の人物に限られている。老年は「実盛」女性は「巴」各一番に限られている。平太は武勇のすぐれた武士として、中将は優雅な貴公子として描かれ、これが修羅能の舞踊との関係をみると、カケリを舞うのは、「田村」「八島」「箙」「忠度」「通盛」「経正」「俊成忠度」の七番のうち、平太をつけるのが「田村」「八島」「箙」「兼平」の四番なので、「兼平」のみがカケリを舞っていない。また敦盛をつける「敦盛」「生田敦盛」は、本来女性の舞う中舞を舞うのも異色がある。他の曲は舞はないが、謡の文句に合せて、カケリ的な動作を演ずるので、これらを準カケリ物とも呼んでいる。これらのカケリの動作は、修羅道の苦しみと、争いの勇ましさを示すものとして、修羅能の中心をなすものであるが、一曲の持つ内容としては「忠度」「経正」「俊成忠度」のように芸術に対する愛着を示し、「清経」「通盛」「巴」のように情豊かな感情を示し、全体として、優雅な美への追求が漲っている。これらの印象は「八島」や「頼政」「実盛」にも見受けられ、ここに修羅能を確立した世阿弥のねらいがはっきりと見受けられる。

三

前述の思想は、謡曲の詞章の上にも端的に表現されており、世阿弥は、「源平などの名のある人の事を、花鳥風月につくりよせ」（花伝書）て書くよう注意しており、またその典拠を重んずる立場から、「源平の名将の人体の本説ならば、殊に殊に平家の物語のままに書くべし」（能作書）ともいっておるが、「こと葉いやしからずして姿幽玄ならんを、うけたる達人とは申すべきか。まづ、この道に至らんと思はんものは、非道を行ずべからず。ただし、歌道は風月延年のかざりなれば、もっともこれをもちうべ

し。」という花伝書冒頭のことばが、世阿弥の全作品、修羅能物のなかにも、いかに巧みに用いられているかを検討してみたいと思う。

作品を前述六番に限ったのは、それがもっとも信頼できる世阿弥作と認めたからであるが、他の六番、ことに「知章」「朝長」の二番は世阿弥として疑いないものであるが、一応割愛して、「申楽談儀」にでている六番についてその引用詩歌を次に掲げてみよう。

「敦盛」

1　シテ　サシ　かの岡に草刈る男野を分けて帰るさになる夕まぐれ……かの岡に草刈るをのこしかな刈りそありつつも君が来まさむ御馬草にせむ（拾遺集柿本人磨万葉集・和漢朗詠集にもある）

2　シテ　下・上歌　問はばこそ独りわぶとも答えまし須磨の浦藻塩たれとも知られなば……わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答えよ（古今集在原行平）

3　掛合　樵歌牧笛……山路日暮満耳者樵歌牧笛之声（和漢朗詠集　紀斉名）

4　初同　住吉の汀ならば高麗笛にやあるべき……波の音にたぐへてぞ聞く墨の江の汀にて聞く高麗笛の声（夫木抄）

5　後シテ　淡路潟通ふ千鳥の声聞けば寝覚も須磨の関守は誰そ……淡路潟通ふ千鳥の鳴く声に幾夜寝ざめぬ須磨の関守（金葉集　源兼昌）

6　地　サシ　誠に槿花一日の栄に同じ……松樹千年終是朽、槿花一日自為栄（和漢朗詠集　白楽天）

「実盛」

1　ワキ　上歌　独りなほ仏の御名を尋ね見むおのおの帰る法の場……結句法の場人（古歌　一遍上人の詠という）

2　シテ　サシ　笙歌遙かに聞ゆ孤雲の上、聖衆来迎す落日の前……原句のまま（十訓抄　大江定基辞世の句）

3　掛合　深山木のその梢とは見えざりし桜は花にあらはれたる……結句あらはれにけり（詞花集　源頼政）

4　初同　草葉の霜に翁さび人な咎めそかりそめに現われいでたる実盛が……翁さび人な咎めそ狩衣けふばかりとぞ田鶴もなくなる（後撰集　在原行平）

5　シテ　掛合　埋木の人知れぬ身と沈めども心の池のいひがたき修羅の苦患の数々……小山田の苗代水はたえぬとも心の池のいひは放たじ（後撰集）

6　地　気霽れては風新柳の髪を梳り、氷消えては浪旧苔の髭を洗ひて見れば……結句髭を洗ふ（和漢朗詠集　都良香）

7　地　もみぢ葉を分けつつ行けば錦着て家に帰ると人や見るらん……原歌のまま（後撰集）

「忠度」

1　ワキ　サシ　下歌　猪名の小笹、昆陽の池……（新千載集、新後拾遺集に同地を詠んだ歌がある）

2　ワキ　上歌　芦の葉風の音……夏虫の光ぞそよぐ難波潟芦の葉分けに過ぐる浦風（拾遺集）

3　地　憂きに心はあだ夢の覚むる枕に鐘遠き……暁の鐘ぞあはれをうちそふる浮世の夢の覚むる枕に（新勅撰集　藤原宗経）

4　シテ　一声　あまの呼び声ひまなきにしば鳴く千鳥音ぞすど

き……大宮の内まで聞ゆあびきすとあご調ふるあまの呼び声（万葉集　長忌寸意吉麿）

5　シテ　サシ　わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ……原歌のまま（古今集　在原行平）

6　シテ　掛合　行き暮れて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし……原歌のまま（千載集　読人不知として平忠度作）

7　地　心の花か蘭菊の孤川より引き直し……梟鳴松桂枝、狐蔵蘭菊叢（白氏文集第一図宅の詩）

8　キリ　花は根に帰るなり……花は根に鳥は古巣に帰るなり春のとまりを知る人ぞなき（千載集　崇徳院）

「清経」

1　ツレ　見るたびに心づくしの髪なればうさにぞ返す本の社に……原歌のまま（源平盛衰記三十三）

2　地　手向け返して夜もすがら涙と共に思ひ寝の夢になりとも見え給へと寝られぬに傾くる枕や恋を知らすらん……つつめども枕は恋を知りぬらん涙かからぬ夜はしなければ（千載集　久我大臣）

3　シテ　サシ　うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき……原歌のまま（古今集　小野小町）

4　地　形見こそなか〳〵憂けれこれなくは忘るる事もありなんと思ふ……形見こそ今はあだなれこれなくは忘るる時もあらましものを（古今集）

5　シテ　世の中のうさには神もなきものをなに祈るらん心づくしに……原歌のまま（平家物語　宇佐八幡の神歌と伝う）

6　地　さりともと思ふ心も虫の音も弱り果てぬる秋の暮かな……原歌のまま（千載集　藤原俊成）

7　シテ　いふならく奈落も同じうたかたのあはれはたれも変らざりけり……いふならく奈落の底に入りぬれば刹那も首陀も変らざりけり（源平盛衰記　道歌）

8　キリ　修羅道にをちこちのたづきは敵……遠近のたづきも知らぬ山中に覚束なくも呼子鳥かな（古今集）

「頼政」

1　シテ　掛合　名所とも旧跡ともいさ白波の宇治の川に舟と橋とはありながら渡りかねたる世の中に……世の中に舟と橋とはありながら渡りかねたる身をいかにせん（古歌）

2　シテ　掛合　わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり……原歌のまま（古今集　喜撰法師）

3　シテ　掛合　月こそ出づれ朝日山山吹の瀬に影見えて……秋風の山吹の瀬の岩波にぬる夜よそなる宇治の橋姫（夫木抄　鳥羽院）

4　地　夢の浮世の中宿の宇治の橋守年を経て老の波もうち渡す遠方人にもの申すわれ頼政が幽霊と……千早ぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年の経ぬれば（古今集）年を経て恋ひわたる身の苦しさをあはれと思へ宇治の橋守（新拾遺集按察使実継）うち渡す遠方人に物申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも（古今集　旋頭歌）

5　後シテ　伊勢武者は皆緋縅の鎧着て宇治の網代にかかりけるかな……原歌のまま（平家物語　頼政の子仲綱）

6　地　蝸牛の角の争ひもはかなかりける心かな……蝸牛角上争何事（白氏文集廿六）

7　シテ　埋れ木の花咲くこともなかりしに身のなるはてはあはれなりけり……原歌のまま（平家物語　源頼政）

「八島」

1　シテ　漁翁夜西岸に傍うて宿す、暁湘水を汲んで楚竹を焼く……原詩「湘水」が「清湘」となる（古文真宝前集　柳宗元）

2　シテ　しかも今宵は「照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものもなき」蜑の苫……「　」内原歌のまま「しくものも」が「しくものぞ」となる（新古今集　大江千里）

3　地　群れゐる田鶴を御覧ぜよなどか雲居に帰らざらん……天つ風ふけひの浦に居る田鶴のなどか雲居に帰らざるべき（新古今集　藤原清正）

4　シテ　ロンギ　わが名を何と夕波の引くや夜汐も朝倉や木の丸殿にあらばこそ名乗りをしても行かまし……朝倉や木の丸殿にわれをれば名のりをしつつ行くは誰が子ぞ（新古今集　天智帝）

5　キリ　水や空空行くも又雲の波の……水や空空や水とも見えわかず通ひてすめる秋の夜の月（新後拾遺集）

四

次に引用された役どころ、出典、作者についてまとめると次のようになる。（和歌についてのみ）

「敦盛」

1　シテ　サシ　拾遺集　人麿
2　シテ　下・上歌　古今集　行平
3　初　同　夫木抄　読人不知
4　後シテ出　金葉集　兼昌

「実盛」

1　ワキ　上歌　詞花集　一遍上人
2　シテ　掛合　後撰集　頼政
3　初　同　後撰集　行平
4　後シテ　掛合　後撰集　読人不知
5　地　後撰集　読人不知

「忠度」

1　ワキ　上歌　拾遺集　読人不知
2　地　新勅撰集　藤原宗経
3　シテ　一声　万葉集　長忌寸意吉麿
4　シテ　サシ　古今集　行平
5　シテ　掛合　千載集　忠度
6　キリ　千載集　崇徳院

「清経」

1　ツレ　源平盛衰記　読人不知
2　地　千載集　久我大臣
3　シテ　サシ　古今集　小野小町
4　地　古今集　読人不知
5　シテ　平家　神歌
6　地　千載集　俊成
7　シテ　源平盛衰記　読人不知
8　地　古今集　読人不知

「頼政」

1	シテ　掛合	古　歌	
2	シテ　掛合	古今集	喜　撰
3	シテ　掛合	夫木抄	鳥羽院
4	地	古今集	読人不知
5	地	新拾遺集	按察使実継
6	地	古今集	読人不知
7	後シテ出	平　家	仲　綱
8	シテ	平　家	頼　政

「八島」

1	ツレ シテ	新古今集	大江千里
2	地	新古今集	藤原清正
3	シテ　ロンギ	新古今集	天智帝
4	キリ	新後拾遺集	読人不知

次に引用回数の多いものをあげてみると

1　行き暮れて……（千載集　忠　度）忠度、簾、他3
2　形見こそ……（古今集）清経、他4
3　わくらはに……（古今集　行　平）敦盛、忠度、他3
4　遠近の……（古今集）清経、田村、他6
5　深山木の……（詞花集　頼　政）実盛、他3
6　花は根に……（千載集　崇徳院）忠度、簾、他3
7　さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな（千載集

忠度）この歌は「俊成忠度」その他で五回引用、「忠度」には、この事件を扱った叙述はあるが引歌なし。

なお、漢詩は白楽天の「背燭共憐深夜月」が十回、「松樹千年終是朽」が四回というのが目立つ。

五

一曲の謡曲のなかには、四首から八首にのぼる和歌がそれぞれ引用されているが、そこへ漢詩も入り、更に仏教教典からの引用、源氏物語、平家物語その他の物語類からの引用を数え上げると極めて多くの語句が引用されている事になる。ここでは、その一端の和歌引用に目を向けたわけであるが、これだけの資料では世阿弥の作曲した詞章の特徴という事は勿論明かではないが、これもその一資料であると見ていただきたい。

まず引用された原歌はどこから取っているかを見ると、古今集がもっとも多く7首、以下千載集5、平家物語4、後撰集、新古今集3、源平盛衰記、新拾遺集、新後拾遺集、拾遺集、夫木抄2となって、原典の使用頻度が大体見当がつく。なお広く愛唱された和歌が数多く使われているのも覗われる。

役どころではシテが最も多く16、地が15、ワキやツレは僅少である。シテでは前後ともシテの出と、ワキとの掛合の部分が多い。全体に前シテに多い。これらは、作者が深く心をこめて幽玄美を出そうと企図しているのが分る。また、地にしても、シテの心持を述べているので、これらの和歌が、シテを中心に歌われていることも既に先人によって述べつくされているところである。

次に、引用のしかたについて検討してみよう。

1　原歌がそのままか、一二字かわっだけで使われているもの。
（番号は前述の番号）

「実盛」1　3　7

「忠度」5　6
「清経」1　3　5　6
「頼政」2　5　7
「八島」2

以上十三首、使い方は、歌詞が文中にとけこむようにして使われており、考えようによっては歌をはじめに意識して、その歌詞が入るように前後を綴ったものとも考えられる。ただし、「八島」の場合は、歌の意味は全然なく、「しくものぞなき」のまさるものがないという意を、敷くものがなにもないというためにこの歌を全部引用したものということができる。

原歌をそのまま引用するのは、文を美しくするのに有効かと思われるが、それだけ技巧的には簡単な感じがする。

2　原歌の一部が引用されているもの。

残り全部がこれに入るわけだが、これもいくつかに分けることができる。

イ　文中の情景を美しく表現したもの。

「敦盛」1　5
「実盛」5
「忠度」2　3　4　8
「清経」2　4
「頼政」1　3　4
「八島」3　4　5

ロ　古歌であることを言明しているもの。

「敦盛」4

ハ　歌枕として使っているもの。

「忠度」1

ニ　原歌の語句を借りて全く別の意味に使っているもの。

「敦盛」2
「実盛」4
「清経」7　8
「八島」2

文中の情景を美しく表現するために古歌の一部を引用する方法は最も普通の方法である。

次に「ニ」の項で、「敦盛」では「藻塩たれつつ……」の「たれ」を「誰」として使い、「八島」の例は前に説明した通り、他も同工のもので、歌の一部を掛詞的に使用している例で、相当技巧をこらした方法といえよう。

3　原歌はなく、それを文中に扱っているもの。

「忠度」「千載集」にのっている「平忠度」作で、さざ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かなという歌で、「平家物語」にでている「忠度」の故事を扱った内容だから、これは謡曲のなかでも特異なものといえよう。

以上、一応世阿弥の修羅能物の謡曲詞章のうち、その引用詩歌の整理検討を行ってみたわけであるが、さらに細部にわたる詞章の検討、他の修羅能との比較、および世阿弥作の他の謡曲との比較検討を行なって、はじめて世阿弥の修羅能の特質が明かになってくると思う。なおこの際、できれば廃曲となった世阿弥の作品（特に修羅能もの）との比較ということがきわめて重要だと思われる。